

うまぶるっ！

めでゆーさ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、人々の間でおとぎ話として語られていた『星の島』イスタルシア。

そこにたどり着いた歴戦の騎空団。

その騎空団の団長は二人居た。

一人は芦毛のエルーン。

もう一人は、ただのトカゲだった!?

アタシ（オイラ）はエルーン（トカゲ）じゃねえ!!!!

目次

研究の成果	1
着装完了!?!?ギガントブルボン	4

研究の成果

コポポ、コポポと泡を立てながら沸騰する薬草の煮汁。
何故か虹色に光っている液体。

レヴィオン王国、ユリウスの研究室。

ここでは二人の男女が私利私欲の為、日夜研究を続けていた。

「ユリウスくん、お腹が空いたぞ…」

「その倉庫にスルメイカが干してあったはずだ。それを食べるという、タキオン。」

「食欲には逆らえないから食べはするが…なんでキミはそう触手つぽいつまみばかり用意するんだね…」

若干ピンクっぽいロンゲの男の名前はユリウス。

現在研究室を構えているレヴィオンの元騎士団所属の研究者。

彼はある秘密を抱え、そのせいでレヴィオン王国に一波乱起こした事があるのだが、それは後程。

そして、茶色の癖毛な人の身体に馬の耳と尻尾をくっ付けた可愛らしい見た目をした少女の名前はアグネスタキオン。

ウマ娘…この空の世界に住むエルーンという種族とは違った種である彼女は“超高速の粒子”という異名を持つマツドサイエンティストだ。

偶然出会った二人は瞬間的に“研究者”としての共通点を感じ取り、今まさにこうして二人三脚で同じ研究をしている。

「まあそろそろ親友殿が帰ってくる。例のブツの準備はこちらでおこう。後は休んでおきたまえ。」

「助かる……………」

ユリウスに薦められ、休憩する事にしたタキオンは研究室端に半ば

投げ出される様にして設置されたソファに溶けるようにして座る。

5日間寝ずにぶっ通しで研究を続けていた弊害がここに来て出た様だ。

一見、人間であるユリウスの方がウマ娘のタキオンより体力があるように思えるが、それは間違いだ。

ある秘密の件で身体が変質したと言えど、ほとんどは男としての意地だろう。

その証拠に休んでいるタキオン以上の濃いクマが、ユリウスの目の下に出来ていた。

「帰ったぞ親友…!？」

「おお!!帰ったかい親友殿!!いやあ待ちくたびれたよ、キミを実験台として扱うにはかなり心が痛むのだがタキオンとの共同研究と臨床実験のおかげで無害化には成功しているさあグイツと飲んでくれたまえグイツと!!」

「ちよ、待て、親友…モゴツ!!？」

——だからだろう、こんな悲劇が起きたのは。

研究室を訪れた男、アルベール——レヴィオン王国の騎士団団長であり、ユリウスの親友だ。あと最近周りがおじさん呼ばわりしてきてちよつと傷ついている——がドアを開けた瞬間ユリウスがまくし立てる様に話しかけ、彼が驚いた拍子にタキオン印の薬品を試験管まるまる一本分飲ませた。

突然の暴挙に噎せつつ詳細を問うアルベール。

そしていきなりアルベール自身の身体が虹色に輝き出した!

「な、なんだ?!?!?」

「それについては私が説明しよう雷迅卿くん。」

驚いているアルベールをよそに、タキオンは薬効を説明し始めた。

今回アルベールに飲ませた薬は体外へ流れ出る電気を変換し、身体を虹色に輝かせるといふ特に役に立つ事もない薬であった。

臨床実験ではお菓子で釣ったアルベールと同じく電気を操るモニ

カ——秩序の騎空団第四騎空艇団船団長補佐というわりかし偉い立場にある女の子。このおっぱいで船団長補佐は無理だろ——とコーヒーで釣ったマンハッタンカフェ——タキオンの親友で、ガチガチのステイヤー。紅茶が苦手でコーヒーが好き。度々タキオンの実験に巻き込まれる被害者——で試した所、モニカには反応を示したが、カフェには効果がなかった事から電気に反応する事に気がついたようである。

「で、これはどうすれば良いんだ!?これでは落ち着いて執務が出来ないぞ!!!」

「落ち着きたまえ親友殿、今その薬に対する解毒剤も作っていた所だよ。」

「そ、そうか。それで進捗はどのくらいなんだ？」

「0だ。」

その後、レヴィオン王国では虹色に輝きながら魔物を倒す騎士団長の姿がたびたび目撃され、その見た目の珍妙さと記憶に残る姿から密かにグッズ化が検討され、本人の知らぬ間にアルベル(虹)フィギュア「1/144」等が国内で出回っていた。

着装完了!?!ギガントブルボン

ここは、羅生門研究艇。

古代から蘇った空の民の敵「壊獣」と戦う最前線であり、一段落着いた今だと主に工学、人体に関わる研究をしている施設である。

そこに訪れた一人のウマ娘が居た……………。

「本当にいいんだね?えーつと……………ミホノブルボン?」

「肯定。着装の開始をお願いします。」

彼女の名前はミホノブルボン。

普段から勝負服としてサイバー感を感じる物を着ている彼女は、『もつとカッコいいのを着てみてよ!』という子供たちの要望に答える為、「ギガントスーツ」なるものを開発したシロウ——羅生門研究艇のメンバー。ギガントスーツ着装者であり、妻子持ち——にそのギガントスーツとやらを着させてくれないかと頼み込む為に羅生門研究艇を尋ねたのだ。

ギガントスーツとは、壊獣と戦う為にシロウが開発した強化外装であり、古代の技術を用いた物で使用者の身体にとんでもない負荷をかけるリスクを伴う。

ミホノブルボン自身それを所望したのだが、前述の通りとんでもない負荷がかかるのと、シロウのギガントスーツ一着しか強化外装としての運用をされている物がなく、彼女には内緒でコスプレ用のギガントスーツを着せることになった。(コスプレと言ってもゴツイギガントスーツなので一人では着られない。シロウに手伝って貰っている。)

「よし、これで大丈夫だ。」

「着装、完了しました。ありがとうございます。」

ギガントスーツを着ることが出来たのを確認し、ミホノブルボンはクルリと一回転。心なしか高揚しているようである。

だが、突如としてサイレンが響き渡る。

「ッ!?壊獣か!」

「急行。私が行きます!」

「着せてるのそれコスプレ…って速ア!」

壊獣出現のサイレンにいち早く反応したミホノブルボン、「コンセントレーション」が発動したかの様にサイレンが鳴り次第即行動。バクシンの委員長も花丸をあげるレベルである。

羅生門研究艇はちようどある島へと停泊しており、その島からの通報なのだが、快調に飛ばしていく。

「発見。撃退目標、壊獣。」

ここまでのタイム、サイレンが鳴ってからおよそ二分。

壊獣を発見次第、彼女は蹴る、蹴る、蹴る。

彼女の豪脚で蹴り飛ばされた壊獣はどてっ腹に風穴を開けて倒れる。

「ちよ……速い……っつて!」

シロウが駆けつけた頃には小型の壊獣は全滅。

残った巨大壊獣とミホノブルボンのタイマンであった。

「必殺。ハイパーメガトンキック。」

彼女は向かってくる壊獣に背を向け、タイミングを合わせて脚をバチバチと放電させ、回し蹴り。

数秒もがいた後、巨大壊獣は爆発。島に平和が戻ったのである。

(ぶ、プラーシーボ効果……)

ウマ娘自体の身体能力もあつたらうが、思い込みだけでここまで強くなれるものなのかとシロウは戦慄した。

その後ギガントスーツがお気に召したブルボンは、コスプレをまるまる持ち帰り、ライスシャワーに着させて楽しんだという。